KUT OB OG INTERVIEW 2023 20 AUTUMN

挫折だって成功体験。関大で培った突破力で、霞が関を広報する。

厚生労働省　労働金庫業務室長
紀伊洋一（きい よういち）さん
社会学部社会学科マス・コミュニケーション学専攻
1987年卒

マスコミ志望から霞が関へ。そして念願の広報に

私は現在、霞が関の厚生労働省本省で、労働金庫業務室長として全国の労働金庫の統括に関わる業務に携わっています。一般的に省庁の人事制度は、「キャリア」と呼ばれる「総合職」と、「ノンキャリア」と呼ばれる「一般職」と「専門職」の3つに分かれています。私は「専門職」の「労働基準監督官」の試験区分で、厚生労働省に入省しました。

本省では労働基準行政を中心に働く方々の労働条件、安全衛生や福祉に関わる政策を担当しており、現在は労働金庫業務室長を務めています。労働金庫とは労働組合を会員とする金融機関のことで、たとえば住宅や教育のローンなどを通じて労働組合員の福祉や福利厚生を担っています。その労働金庫の指導や検査などが私の業務です。一般職や専門職が就けるポストとしては、こうした課室長がキャリアパスでは事実上トップになります。

実は就職活動のときは、テレビ局を中心とするマスコミ業界を志していました。しかし結果は惨敗。その後国家公務員を目指すも、採用試験がほとんど終了しており、ある民間企業に就職しました。そんな日々のなか、お世話になった教授の「マスコミでなくても、宣伝部や広報部で学んだ知識を活かすことはできる」との言葉を思い出し、また一度挫折した国家公務員の夢も同時に叶えるべく、中央官庁の広報室を目指したわけです。そこで何とか試験に合格、労働省（現厚生労働省）に入省しました。

厚生労働省の業務は、労働災害の防止や賃金などの労働条件に関する監督指導業務など「人」に関わる仕事として、大変やりがいがあります。入省後に念願であった本省広報室への異動もあり、労働基準監督官で初の報道係長として中央官庁の広報・報道にも携わりました。広報で一番大事なことは危機管理であり、何かあったときダメージを最小限にするための重要な部署です。今は、労働金庫業務室長という役職に異動していますが、広報で培った視座を持ちつつ充実した職業人生を送らせていただいています。

地元公立校からのスタート――成功体験を学び、挫折を乗り越える

関西大学は幼い頃から憧れの大学であり、思い入れもありました。実は母方の従兄弟が関西大学に合格したときに親戚中が大騒ぎになり、そのとき関西大学が目指すべき大学の頂点と決められてしまったのです。決して進学校ではない地元公立校に通う高校生にとって、関西大学はハードルの高い存在でしたが、そこで一念発起。合格を確かめて両親に電話したときは、まるで奇跡が起こったと歓喜しました。ここで頑張って関西大学に入ったことは、私の成功体験のひとつです。

学生生活は楽しかったです。高校時代と比べて居心地がいいというか、話が合う人たちにやっと出会えたかな、と。いくつかのグループに

所属しましたが、その中でも最も仲の良い友人とのつきあいは、今も続いています。卒業から36年経っても、お盆と年末とゴールデンウィークは全員必ず集まっています。当時はスキーや旅行など、いろいろなことをして遊んでいましたが、最近は飲み会が中心ですね。青春を謳歌できたのは、同じ言葉で語り合える仲間がいたからこそだと思います。

大学では学業に専念し、資格も事務系だけではなく理工系を含めて40ほど取得しました。専攻したマス・コミュニケーション学では放送の分野について学びましたが、特にテレビが好きで、放送というものが成り立つ仕組みについて研究していました。

たとえば東京では5つある民放局が、県によっては1つや2つという場合もあります。このように地域によっての格差——置局格差というのですが——が大きいのです。あるいは全国で流行っている番組が大阪だけ放送されていないとか、そういった状況に興味がありました。このような格差に対する疑問は、後に国家公務員を志すことになった大きな理由のひとつでもあります。

一方で就職活動に際しては、たびたび上京し、キー局を訪問して自己アピールをしたり、実際にテレビ局でアルバイトするなど、いろいろとやりました。しかし目指していたテレビ局をはじめマスコミ関係は全滅。たとえば面接時に大学で何をしていたのか聞かれ、「勉強」と答えたら呆れられたこともありました。また、ある企業の最終面接では、「人生は努力か要領か」と聞かれて「努力です」と胸を張って答えたのですが、それで縁が切れました。おそらく、その答えは面接官の期待とは違っていたのかもしれません。

その後は民間企業に就職しましたが、当時はバブル景気で時代的にも勢いがあり、もう一回挑戦してみようと思ったのですね。そして結果的には、広報としてマスコミに関わる夢と、国家公務員として働く夢の両方を叶えることができたと思います。元々は親戚に市役所に勤める公務員がおり、両親はここへの就職も期待していたようですが、どうせ狙うのだったら霞が関を、というのは最初から考えていました。まあ若気の至りというか、やれるものだったらやってみようと。これまで何回かは挫折したこともありましたが、最終的には、これでよかったと思います。

学生の皆さんへ——努力の大切さと、国家公務員としてのやりがい

今、学生の皆さんに何か伝えるとしたら、自分で壁を設けないで、やりたいことには挑戦しよう、と言いたいです。たとえば就職でも、関西大学から霞が関なんて夢だと思っていちゃダメです。まずやってみることが大切です。ちょっとしたことで挫折したり辞めたりする人も多いようですが、人生一度きりです。やりたいことを見つけることのほうが大事です。あきらめないで欲しいですね。

「努力する姿は、必ず誰かが見ている」という話は、私も最初は信じていませんでしたが、実際に自分でも経験しました。一生懸命頑張り続ければ、いつか認めてもらえる。それは嘘ではないと実感しています。先ほど「努力か要領か」のお話をしましたが、本当の努力とは要領を得た努力なのでしょう。しかし、一生懸命頑張っていれば誰かがきちんと評価してくれる。誠実な努力を続けていれば、必ずチャンスはあると思います。

私が国家公務員になって感じたことは、社会的信用の高さに加えて、頑張れば正当に評価してくれる平等さです。人に話を聞いてもらえて、世の中を大局的に見ることができる。先ほど「置局格差」のお話をしましたが、東京への一極集中や地方が衰退していく状況は、なんとか是正したい。そういう思いがあるならば、非常にやりがいのある仕事です。

公務員になって広報をやろうという人は、そんなに多くありません。でも役所にとって広報は、とても大事なことなのです。自分たちが行っている施策も、知ってもらえなければ意味がないのです。国民の皆さまの大切な税金を使っていろいろな仕事をやっているのですから、知らせようとする努力がもっともっと必要です。

今の厚生労働省の広報室は、専門の方を民間からどんどん入れて一生懸命やっていますが、二十数年前当時の広報室というのは、まだまだ閑職のようにも見られていました。私は、そこに堂々と手を挙げて行ったわけです。時代も変わりましたし、むしろ変えていったのだとも思っています。

もし興味とやる気のある方には、是非「霞が関の広報パーソン」を目指していただきたい。究極的には、霞が関に来たからには国を変えてやろうという気概と、それを国民の皆さまに伝えていこうという志が大切ではないかと思います。

「あなたにとって関西大学とは?」

関西大学での日々は、自分の人生で一番充実したときでした。決して進学校ではない地元公立高校からの合格を通じて成功体験を与えてもらい、やればできるという突破力を培ってくれた場所でもあります。いろいろなことに挑戦できたし、それを自信として次のステップに行くこともできました。関西大学での成功体験は、その後の就職においても挫折を乗り越える力をくれたと思います。まさに私の精神的支柱です。

そして関西大学には、勉学でもスポーツでも幅広いフィールドで互いに競い合えるという土壌があります。キャンパスで出会った、話が合って価値観を共有できる仲間たちは生涯の友となり、今も交流が続いています。青春を謳歌し、人生で最も充実した時期を過ごすことができました。関西大学に進学して本当によかったと思います。

（関西大学東京センターにて）

関西大学東京センター

100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL：(03) 3211-1670（代）FAX：(03) 3211-1671
https://www.kansai-u.ac.jp/tokyo/

公式website　公式Facebook　公式X（TW）　LINEスタンプ

・関西弁ver.
・キャンパスver.
・お仕事ver.

KUT OBOG Interview 2023-Autumn

＊無断転載を禁じます。

発行・監修｜関西大学東京センター
企画・協力｜校友の皆さん

お問合せ先
tokyo@ml.kandai.jp